

国内経済情勢

概観

住宅建設が増加を続けているものの、設備投資や輸出の落込みが続き、最終需要の回復はなおはかばかしくない。生産は夏季休暇とからめた減産の動きもあって半年ぶりに減少をみたが、出荷の停滞から在庫調整は幾分足踏み模様となっている。

消費者物価は米価引上げの影響などからかなりの上昇をみたが、商品市況は秋需の伸び悩みから弱保合い商状を示し、卸売物価も落ち着いている。

金融面では、企業の資金需要が滞貨減産資金等を中心に底堅い動きを示すなかで、金融機関の融資態度は引き続き弾力化してきており、銀行貸出はかなり増加した。

8月の国際収支は、貿易収支の黒字幅がやや縮小し、長期資本収支もわずかながら流出超となったため、総合収支では再び赤字に転じた。

生産は6か月ぶりに減少

鉱工業生産(季節調整済み、速報)は、7月にかんりの増加(前月比+2.2%)をみたあと、8月には前月比-1.1%と、6か月ぶりに減少した(前年同月比-7.2%)。これは、自動車、化学等では引き続き増産ないし減産緩和が進められたものの、紙・パルプ、非鉄、セメント等で夏季休暇にからめた集中減産が行われたためである。

鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は、7月かんの増加(前月比+3.0%)をみたあと、8月には前月比-2.2%と減少した(前年同月比-6.1%)。これには船舶の出荷減少の影響が大きく、これを除いてみると-0.6%の微減となった。財別にみると、耐久消費財は自動車、夏物家電を中心にかんりの増加を示したものの、生産財は鋼板、非鉄、化学製品等の落込みから減少をみせ、建設資材もセメント、棒鋼を中心に減少した。

この間生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、生産財を中心に前月比+0.8%の増加となり、生産者製品在庫率(同、45年=100)も139.5(前月135.4)と3か月ぶりに上昇した。

8月の設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は、金属工作機械、建設機械の減少を中心に前月比-0.7%と引き続き減少した。機械受注額(船舶を除く民需、季節調整済み)は、前月減少のあと、前月比+33.7%の増加となったが、これは電力からの受注集中によるところが大きい。一方8月の建設工事受注額民間産業分(季節調整済み、速報)は、前月減少のあと当月は前月比+25.4%と増加した。なお官公庁分(同)は、前月比-1.8%と引き続き減少した。

7月の新設住宅着工戸数(季節調整済み)は、民間住宅ローンの増加等から前月比+5.5%の増加を示した。

全国百貨店売上高(季節調整済み)は、7月減少のあと8月には食料品を中心に再び増加に転じ、

前月比 +3.2%の増加となった(前年同月比 +9.8%)。また9月の乗用車(軽自動車を除く)新車登録台数(季節調整済み)は前月比 +16.4%の増加となった(前年同月比 +16.7%)。

8月の労働関連諸指標の動きをみると、有効求人倍率(季節調整済み)は、0.55倍と小幅ながら引き続き低下した(前月 0.56倍)。一方所定外労働時間(同)は3ヵ月連続して増加し、また常用雇用も前月に引き続き横ばいとなった。なお名目賃金(同)は前月比 +3.1%、実質賃金(同)は +2.3%と、それぞれ3ヵ月連続の増加を示した。

商品市況は弱保合い

9月の商品市況をみると、洋紙、重油等が値上がりを見たものの、銅、セメントが下落し、鉄鋼や繊維も総じて軟調地合いを続けたため、全体としては弱保合い商状となった。これは、秋需期入りにもかかわらず実需が引き続き伸び悩み、これを映じて流通段階の仕入れ態度も積極味を欠いていることから、荷動きが引き続き低調にとどまっているためとみられる。

9月の卸売物価は、米、石炭等の値上がりを中心に前月比 +0.3%の上昇となった(前年同月比 +1.0%)。

消費者物価(東京)は、8月に前月比 -0.4%の下落のあと、9月には前月比 +1.9%(前年同月比 +10.7%)と、かなりの上昇となったが、これは主として消費者米価の引上げ、野菜、果物の値上がり等季節的要因によるものである。なお、季節商品を除く総合では前月比 +1.4%の上昇(前年同月比 +12.0%)。

銀行貸出はかなりの増加

9月の金融市場をみると、銀行券は還収超 615 億円と前年(発行超 1,090 億円)とは様変わりの動

きとなったのに加え、財政資金は、外為会計の揚超幅拡大にもかかわらず、税収の落込み、地方交付金の支払増などから払超 4,815 億円と前年(同 2,805 億円)比払超幅を拡大した。このため、その他勘定を合わせた月中資金余剰額は 4,861 億円と前年(同 1,100 億円)を大幅に上回り、日本銀行は貸出回収等によりこれを吸収した。

この間、コール・手形売買市場では、季節的資金需給緩和期入りに伴い、コール・レートは9月1日、10日、10月1日にそれぞれ 0.5%ずつ低下し、また手形売買レートは9月1日に 1%低下したあと、10月1日にはさらに 0.5%低下した(低下後のコール無条件物出し手レート 9.0%、手形買手レート 9.75%)。

9月の銀行券平均発行高は、前年同月比 +11.2%と前月(同 +11.8%)に比べやや増勢を鈍化した。9月の広義マネー・サプライの前年比伸び率は +13.5%と前月(+13.1%)を幾分上回った。これには、民間信用供与の増加から預金通貨が法人預金中心に伸び率を高めたことが響いている。

企業金融の動向をみると、増加運転資金等の需要は引き続き低調にとどまっているものの、鉄鋼、化学等を中心に在庫・減産資金需要が根強いうえ、このところ企業の手元補充のための借入れの動きがみられたなどの事情から、資金需要には前月に続き底堅さがうかがわれた。金融機関の融資態度をみると、こうした資金需要の続くなかで引き続き弾力化しており、企業の資金繰りは概して円滑に推移している。

8月の全国銀行貸出は、月中 8,583 億円増と、前年(4,913 億円増)をかなり上回る伸びを示し、月末残高の前年比伸び率は +11.0%となった(前月同 +10.6%)。

8月の全国銀行貸出約定平均金利は月中 -0.076% の下落と、前月 (-0.093%) に比べ下げ幅をやや縮小したものの5か月連続の低下となり、この間の通算低下幅は -0.377% となった。

9月の公社債市況をみると、都市銀行の売却が比較的落ち着いていた一方、信金・農林系統金融機関の買入れ意欲は値ごろ感もあってやや強まったため、相場は月中強含み基調で推移した。一方株式市況は、月央まで反発を示す場面もあったが、その後原油価格引上げ決定に伴う先行き不安感の台頭等から軟調に転じ、月末旧ダウは3,886円となった(前月末旧ダウ4,089円)。もっとも10月に入ってからは反騰傾向を示し、4日には4千円台を回復した。

米ドル相場は上昇

8月の国際収支は、貿易収支の黒字幅が前月をやや下回ったのに加え、このところ高水準の流入超を続けてきた長期資本収支も、対日証券投資の減少からわずかながら流出超に転じたため、総合収支では268百万ドルの赤字となった(前月黒字57百万ドル)。

8月の輸出(通関ベース、季節調整済み)は、前月増加のあと当月は -1.8% の小幅減少となった(前年同月比 -12.7%)。これは、輸出数量が合

織、化学肥料などを中心に減少したのに加え、輸出価格も鉄鋼等の下落から小幅軟化を示したためである。地域別にみると、欧州、共産圏向けは増加となったものの、前月まで好調な伸びを続けた中近東向けが反落を示したほか、東南アジア向けも引き続き減少した。なお、9月の輸出信用状接受高(季節調整済み)は、前月比 $+7.9\%$ と3か月ぶりに増加した。

8月の輸入(通関ベース、季節調整済み)は、前月かなりの増加を示したあと、当月は再び -7.2% の減少となった(前年同月比 -13.4%)。これは、輸入数量が前月入着集中をみた原油の反動減を中心にかなりの減少となったのが主因であるが、輸入価格も食料、飼料などの下落から小幅の低下を示した。

9月のインターバンク米ドル直物中心相場は、海外市場における米ドル高の影響や輸入決済需資の増高等から月央以降上昇傾向が顕著となり、月中の高値は303円、月末相場は302円70銭と、かなりの上昇となった(前月末297円90銭)。

9月の外貨準備高は月中821百万ドル減と、2か月連続の減少となり、月末残高は13,269百万ドルとなった。

(昭和50年10月14日)